

薩隅方言の「～トル」

久保 蘭, 愛
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/10334>

出版情報 : 文献探究. 45, pp.1-11, 2007-03-30. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

薩隅方言の「～トル」

久保 蘭 愛

要 旨

薩隅方言の「～トル」は西日本諸方言のアスペクト形式「～トル」とは違い、複合動詞後項である。意味も共通語の複合動詞後項「～トル」と違い、付接する動詞の種類によって(1)「数量的な動作の完遂」(2)「極度の状態」という意味を持つ。付接する動詞は限られており、外的運動動作に付接しやすく、その動詞は動作性が高い傾向にある。この「～トル」は、意味用法と、前項動詞との接続において、それぞれ共通語の「完遂」・「完了」等を表す複合動詞後項「～キル」や「～シオワル」「～シオエル」と近似している。本稿は、現代薩隅方言の複合動詞後項「～トル」について、動詞の分類ごとに例文の作成・解釈を行うとともに、共通語の類似した意味用法を持つ複合動詞後項と比較した。

0. はじめに

(1) 花が枯れとった。

この例文を見て、西日本諸方言話者の多くは「花が枯れていた」と解釈するだろう。「結果継続」と捉えるのである。しかし、薩隅方言話者にとって、この例文の解釈は「結果継続」ではない。「そこにある花が全て枯れた」と「数量的な動作の完遂」、あるいは「一輪の花が完全に枯れた」と「極度の状態」として解釈するのである。

西日本諸方言で「～トル」というと、上に挙げたような「結果継続」のアスペクト形式が挙げられるが、薩隅方言で「～トル」というと、「数量的な動作の完遂」と「極度の状態」を表す。おそらくこの「～トル」はアスペクト形式ではなく、複合動詞後項であると考えられる。その根拠として次のような事実が挙げられる。まず第1に、薩隅方言には「結果継続」のアスペクト形式が他に存在する。薩隅方言において「結果継続」のアスペクト形式は、一般的に「～トル」ではなく「～チョル」という形式である^(注1)。第2に、西日本で使われるアスペクト形式「～トル」は、適用できる動詞が幅広いのに対し、薩隅方言の「～トル」は適用できる動詞が限られており、語彙的である。第3に、西日本諸方言のアスペクト形式「～トル」や薩隅方言のアスペクト形式「～チョル」は「結果継続」であるため、発話時に未完了である動作には使えないが、薩隅方言の「～トル」は発話時に未完了である動作にも使用可能である。

(2) ご飯を食べてとってから、ゲームをしやい。

これは薩隅方言の例文であるが、この例文を、西日本諸方言の「結果継続」のアスペクト形式で解釈しようとする、と「*ご飯を食べていてから、ゲームをしなさい。」と解釈され、非文法的な文になる。しかし、薩隅方言では、発話時に「ご飯を食べる」という動作の終了を仮定することが可能であるので、「ご飯を食べ終わってから、ゲームをしなさい」というように自然に解釈できる。これらの事実から、現代薩隅方言の「～トル」は、アスペクト形式ではなく、複合動詞後項であ

ると言える。

薩隅方言の「～トル」に関する先行研究は、概説書等にいくつか見られる。しかし、それらは「完了」あるいは「完遂」の意味を指摘するにとどまり、あまり詳細な記述がなされていないように思われる。

本稿では、まず 1 節で先行研究について述べ、2 節で動詞の分類ごとにそれぞれ例文を作成・解釈を行い、「～トル」の意味用法について考察する。次に、3 節で共通語の「完了」・「完遂」等を表す複合動詞後項との比較を行う。共通語との比較を交えて、薩隅方言の「～トル」がどういった意味用法を持つのか考えてみたい。

1. 先行研究

薩隅方言の「～トル」について、先行研究を挙げる。瀬戸口(1976)に記述がある。以下に該当の記述を挙げる。

十一 その他注目すべき述語部表現法

(前略) 三つに、「～トル」の言い方がある。

○ゴロイト コン コガ チューガッコオ オワイトラン ウヂ ナ。ケシンダデヤ。(下線部筆者注)

とうとうこの子が中学校を終わり終えないうちにね。(父が) 死んだんですからね。

「～ト(ル)」は、ものごとが完全にしはたされることを言う、いわば完済のもの言いとして多用されている。

ここでは、薩隅方言の「～トル」には、共通語の「～トル」に見られない「完済」という意味があることが指摘されている。しかし、それ以外に意味はないのだろうか。また、どういった動詞に付接するのかは書かれていない。

また、上村(1968)には次のような記述がある。

12.完了の表現

1) 他動詞の連用形に-toru が付き、数量的な動作の完了を意味する。薩隅方言的言い方 honna jomitoqta. (本はよんでしまった。) jomitooqta のように長音化する粟生・湯泊・平方言がある。

これは、屋久島方言に関する記述であるが、「薩隅方言的言い方」とあり、付接する動詞に関しては、「他動詞」とされている。これらは、いずれも概説的なものであり、詳しい記述はなされていない。2 節では、これら先行研究の記述を踏まえて、「～トル」が付接する動詞を明らかにし、意味用法の詳細な記述をしたい。

2. 薩隅方言の「～トル」

先行研究では、「～トル」は、「完済のもの言い」、あるいは「他動詞の連用形」に付き「数量的な動作の完了を意味する」とされていた。ここでは、動詞の種類ごとに例文を挙げ、それらについて考察する。例文は、方言調査と、薩隅方言話者である筆者の内省によって作成した^(注2)。方言調査は、アンケート表に回答してもらった形式をとり、その後、二次調査として聞き取り調査を行った。例文に関して、片仮名部分は薩隅方言の例文である。()内の文は、薩隅方言を共通語訳したものである。動詞の分類は工藤(1995)の枠組みに従った。

(A)外的運動動詞

・主体動作・客体変化動詞

(3)ソンマドオ アケトイヤイ。(その窓を最後まで開けなさい。)

(4)ミソシルナ スクメトツタナ。(みそ汁は温め終わった?)

(5)コンキオ ミンナ タオシトランナイカン。(この木を全部倒し終わらないといけない。)

(3)は、途中まで開いている窓を最後まで開けきるという場合である。(4)(5)は、どちらも「～終わる」という解釈になる。「数量的な動作の完遂」と捉えられている。

・主体変化動詞

(6)ミンナ スワイトツタナ。(みんな座り終わった?)

(7)*コンマエ ケシントツタ。(＊この間、死に終わった。)

(8)*ケサ ニュウインシトツタガオ。(＊今朝、入院し終わったよ。)

(9)ウメンキガ カレトツタ。(複数の梅の木が全て枯れた。／一本の梅の木が完全に枯れた。)

ここで、注意すべきであるのは、(6)「スワイトツタ」である。この場合、一人の動作に対して「スワイトツタ」とは言えないが、数人の動作に関してのみ、「スワイトツタ」と言え、その意味は、「全員が着席した」という意味になる。また、(9)「カレトツタ」にも注意したい。この場合、文脈、あるいは状況によって「極度の状態」とも「数量的な動作の完遂」とも解釈できる。一本の梅の木を見て、(9)のように言う場合には「完全に枯れた」というように「極度の状態」と解釈できる。一方、複数の梅の木を見て(9)のように言う場合には「(そこにある複数の)梅の木が全て枯れた」というように「動作の完遂」として解釈できる。(7)(8)は非文法的な例文である。

・主体動作動詞

(10)モ ホンナ ヨントツタ。(もう本は読み終わった。)

(11)*コドンノ マットツタ。(＊子どもを待ち終わった。)

(10)は、「本を最後まで読み終わった」という解釈になり、「数量的な動作の完遂」を表す。その場合、本が1冊でも複数でも適用可能である。主体変化動詞では、複数の場合にのみ使用可能だったが、この場合は本の冊数に関わりなく使用できる。それは、「本を読む」という動作に時間的、

あるいは量的幅が生じるためであると考えられる。(11)は共通語でも非文法的な文である。同じ主体動作動詞でも、「読む」と「待つ」とでは、一方は適用可能で、一方は適用不可能という違いが現れる。これは、動作性の高低の差によるものではないかと考えられる。薩隅方言の「～トル」は、先行研究の指摘と、これまで例文で見えてきたところ、「数量的な動作の完遂」を表す複合動詞後項である。「待つ」という動作に、目に見えて動きがないために「～トル」がつきにくいのではないだろうか。動きがないという点において、考えなければならないのが、先に挙げた「枯れる」という主体変化動詞である。(9)の例文を見ると、「枯れる」は「～トル」が付接可能であった。「枯れる」も「読む」や「座る」と比較して目に見えて動作が行われるわけではない。しかし、「枯れる」前と「枯れた」後では、主体に大きく変化がある。そして、その変化には時間的幅が生じる。そのため、「枯れる」には「～トル」が適用可能であり、「待つ」には適用不可能なのではないかと考える。

・二側面動詞

(12)ソコン サカオ クダイトッセー ヒダイセ マガイヤイ。

(そこの坂を下りきって左に曲がりなさい。)

(13)*ノラネコガ ヘイトッタ。(野良猫が減り終わった。)

(12)の「トッセー」の「セー」は、「さまに」が変化した形で、薩隅方言において接続助詞「て」と同じような意味用法を持つ。解釈は、「坂を最後まで下りきる」となる。これは、「数量的な動作の完遂」であると解釈される。一方、同じ二側面動詞でも(13)の「減る」という動詞には「極度の状態」と解釈しても「数量的な動作の完遂」と解釈しても非文法的な文になってしまう。これは、「減る」という動詞が、数量的な動作を表すことのできる動詞ではあっても、残量が0になることはないためであると考えられる。「減る」ということは、減った結果、その残量が0になる場合も考えられるが、残量がある可能性も多く含んでいる。「～トル」は、「数量的な動作の完遂」を表す。そのため、残量が0にならない「減る」は「～トル」とはなじまないと考えられる。

・遂行動詞

(14)ミンナ アヤマイトッタナ。(全員に謝り終わった?)

(15)*カンサアニ チカイトッタド。(神様に誓い終わったよ。)

(14)は、主体変化動詞の例(6)と同様に、一人の動作に対しては使用することができない。複数の対象に対して「アヤマイトッタ」と言え、その意味は、「全員に謝り終わる」という「数量的な動作の完遂」を表す。一方、(15)は非文法的な文である。これは、(11)の「待つ」同様、「誓う」という動詞が目に見えて動作が行われないことによって、「～トル」が使用不可能なのではないだろうか。

(B)内的情態動詞

以下の例文は全て、「数量的な動作の完遂」と解釈しても「極度の状態」と解釈しても非文法的な例文である。

・思考動詞

- (16)*オモイトランウチイ ユモンジャナカ。(*思い終わらないうちに、言うもんじゃない。)
(17)*ソンハナシワ モ ワカイトッタド。(*その話はもうわかり終わったよ。)

・感情動詞

- (18)*カセダセー イットハ アキラメトッタ。(*加世田に行くのは諦め終わった。)

・知覚動詞

- (19)*ハナン ヨカニオイガ ニオイトツチョッタ。(*花のいい匂いが匂い終わっていた。)

・感覚動詞

- (20)*メガ クラントッタ。(*目が眩み終わった。)

(C) 静態動詞

・存在動詞

- (21)*エンピッカ イツツ アイトッタ。(*鉛筆が五つあり終わった。)

・空間的配置動詞

- (22)*ヤマガ ソビエトツチョッ。(*山がそびえ終わっている。)

・関係動詞

- (23)*ワゲン マゴンコワ マツザカニ ニトッタ。(*うちの孫は松坂に似終わった。)

・特性動詞

- (24)*ソンフクワ ニオトツチョッ。(*その服は完全に似合っている。)

内的情態動詞と静態動詞に関しては、調査の結果、「～トル」は適用不可能であった。もちろん、全ての内的情態動詞と静態動詞について調査することはできなかったため、適用可能な例も見られる可能性もあるであろうが、おおむね、適用不可能とすることができる。これは、主体変化動詞に付接して「極度の状態」を表す場合を除いて、「～トル」が「数量的な動作の完遂」を意味する複合動詞後項であることから、情態性と、「数量的な動作の完遂」という意味がなじまないものであるためであると考えられる。

以上の例からうかがえることを以下に述べる。

薩隅方言の「～トル」は、主に、上村(1968)や瀬戸口(1976)の指摘するように、「数量的な動作

の完遂」の意味を担う。しかし、「数量的な動作の完遂」の意味だけでなく「極度の状態」を表す場合もある。次の例がその場合である。

(9)ウメンキガ カレトツタ。

(複数の梅の木が全て枯れた。／一本の梅の木が完全に枯れた。) (再掲)

「極度の状態」としての解釈は、主体変化動詞の場合に限られるようである。しかし、文脈や状況がわからない場合、(9)(12)のような例文は「極度の状態」よりも「数量的な動作の完遂」として解釈されやすいように思われる。このことは、現代薩隅方言においては、複合動詞後項「～トル」の意味は「数量的な動作の完遂」が中心的であるということを示していると考えられる。

次に、「～トル」が付接する動詞であるが、静態動詞と内的情態動詞には付接しにくい。付接するとすれば、外的運動動詞に付接する。外的運動動作の中でも、動きが目に見えて行われる動詞に付接する傾向にある。「数量的な動作の完遂」を表すということは、「～トル」が動作が終了する時点を表しているということである。これは、動作性の高い動詞に付接しやすく、情態性の高い動詞には付接しにくいことを指していると思われる。また、上村(1968)では「他動詞の連用形に付」くとされているが、上記の(6)や(14)のように「座る」「謝る」などの自動詞の連用形にも付くことができる。

また、「～トル」は、外的運動動詞であっても、上村(1968)の指摘する通り、数量や時間等に幅がある動詞にしか適用できない。

(6)ミンナ スワイトツタナ。(みんな座り終わった?)

(7)*コンマエ ケシントツタ。(＊この間、死に終わった。)

(14)ミンナ アヤマイトツタナ。(全員に謝り終わった?) (再掲)

(6)、(14)は、一人の動作については言うことができず、複数の人間の動作についてしか言うことができない。「座る」という動作も、「謝る」という動作も、一人の人間がその行為を行うのに、時間的にも数量的にも幅がない。しかし、複数の人間がその動作を行う場合には、時間的、あるいは数量的に幅が生じる。そのため、複数の人間がその行為を行うときのみ使えるのだと考えられる。(6)(14)の例に対し、(7)の例の「死ぬ」という動作は、その動作が起こった瞬間、動作は終了する。つまり「死ぬ」という動詞は、時間のある一点だけを指しており、時間的幅がない。そのため、「～トル」が適用できないと考えられる。

しかし、数量的・時間的に幅があっても使えない場合もある。

(13)*ノラネコガ ヘイトツタ。(＊野良猫が減り終わった。)

これは、先に述べたように、「減る」という動詞は残量が必ずしも0になるわけではないためであるとされる。「～トル」は「数量的な動作の完遂」を表す。そのため、残量が0にならない動詞には、数量的な幅があり、かつ外的運動動詞であっても使えない。

まとめると、薩隅方言の「～トル」は、

1. 「動作の完遂」を表し、主体変化動詞に付接する場合には「極度の状態」も表すことがある。
2. 数量や時間的な幅を必要とする。

3.外的運動動詞に付接しやすく、動作性の高い動詞に付接する傾向にある。
ということになる。

3. 共通語の完遂・完了等を表す他形式との比較

これまでに、薩隅方言の「～トル」について、動詞の分類ごとに例文を作り、その意味用法を明らかにした。ここでは、更に共通語の「完遂」・「完了」等を表す他形式との共通点・相違点を考えたい。

共通語において、「動作の完遂」あるいは「完了」を表す複合動詞後項は「～キル」「～アゲル」「～シオワル」「～シオエル」等である。それぞれの複合動詞後項についての研究を挙げ、薩隅方言の「～トル」との比較を行う。

はじめに、「～キル」についてである。青木(2004)では、複合動詞「～キル」を、九州方言を視野に入れつつ、歴史的に考察している。複合動詞「～キル」が、本動詞「切る」から派生し、時間の経過とともに、「物の切断」の意味から「終結～強調」や「極度の状態」、「動作の完遂」の意味まで生み出したことを指摘している。以下に青木(2004)の指摘する歴史的展開を挙げる。

- A 物の切断 一部の動作動詞 (射きる、断ちきる、搔ききる、…)
- A' 空間の遮断 一部の動作動詞 (仕きる、立てきる、せききる、…)
- B 終結～強調 発話・思考動詞 (言ひきる、思ひきる、振りきる、…)
- C 極度の状態 変化動詞、限界動詞 (澄みきる、静まりきる、乾ききる、…)
- D 動作の完遂 動作動詞、非限界動詞

薩隅方言の「～トル」と比較してみると、付接する動詞によって、その意味用法が異なる点で類似している。薩隅方言の「～トル」は2節で述べたように、主体変化動詞に付く場合には「極度の状態」も表すことがあり、それ以外の外的運動動詞に付く場合には「数量的な動作の完遂」を表す。その点で複合動詞「～キル」と類似している。しかし、薩隅方言の「～トル」は発話・思考動詞には適用不可能である。薩隅方言の「～トル」は共通語の「～キル」と比較して適用できる動詞の種類が限られている。

次に、「～シオワル」「～シオエル」と薩隅方言の「～トル」を比較する。「～シオワル」「～シオエル」について、金水・工藤・沼田(2000)では、以下のような記述がある。

シオワル・シオエルは、スルの動作の終了部分を取り出す。シオワル・シオエルの過程は存在せず、スルの終了限界が、シオワル・シオエルの開始限界かつ終了限界ということになる。シオワル・シオエルの結果状態というものも存在しないので、シオワル・シオエル全体としては、瞬間性動詞に近い性質を持っていると言える。(図省略)「??死に終わる・??死に終える」「??倒れ終わる・??倒れ終える」のように、一般に主体変化動詞にはシオワル・シ

オエルは適用しにくい。しかし、「咲き終えた花が散っていく」のように、「結果状態の維持の終了を捉える場合」も一部にはある。

薩隅方言の「～トル」は、「数量的な動作の完遂」あるいは「極度の状態」を表す。したがって、「動作の終了部分を取り出す」点、「過程が存在」しない点において、「～シオワル」「～シオエル」と「～トル」は似た意味を持つ。また、ここでいう「結果状態の維持の終了を捉える場合」というのは、本稿で指摘した「極度の状態」に近い。2節で挙げた例文を例にすると、

(9)ウメンキガ カレトツタ。

(複数の梅の木が全て枯れた。／一本の梅の木が完全に枯れた。)(再掲)

(9)の「極度の状態」の解釈は、「枯れる」という「結果状態の維持の終了」であるが、そこに、「完全に」というニュアンスが附加されたものである。主体変化動詞の場合に「結果状態の維持の終了」の解釈が現れる点において薩隅方言の「～トル」と同様である。しかし、薩隅方言の「～トル」は、適用できない主体変化動詞も存在するが、適用しにくいわけではないため、ここに違いが現れる。

最後に、「～アゲル」「～アガル」との比較を行う。これらについては、姫野(1976)に記述がある。姫野(1976)では、それぞれの複合動詞後項について意味用法を分類・考察し、方向性の強い複合動詞後項(「おろす」「こむ」「出る」等)との比較を行っている。ここでは、「～アガル」「～アゲル」に関する記述を以下に挙げる。

「～あがる」、「～あげる」の担う意味	「～あがる」の動詞(例)	「～あげる」の動詞(例)
上昇(空間的上昇)	駆けあがる	打ちあげる
(序列の上昇)	繰りあがる	繰りあげる
(形の伸長)	盛りあがる	盛りあげる
(形の縮小)	縮みあがる	まくりあげる
(量の減少による形の縮小)	はげあがる	刈りあげる
完了(完成品を伴う作業活動の完了)	織りあがる	織りあげる
(行為の完了)	—	調べあげる
(自然現象の完了)	晴れあがる	—
強調	震えあがる	縛りあげる
社会的行為(下位者→上位者)	—	申し上げる
(上位者→下位者)	—	買いあげる
体内の上昇	—	こみあげる
図々しさ	つけあがる	—

姫野(1976)によると、「～アゲル」「～アガル」は上のように多くの意味用法を持つ。薩隅方言の「～トル」には「～アガル」「～アゲル」のように意味用法は細かく分化していない。「完了」に関しても、複雑ではない。また、動詞との付接については、「あがる」は自動詞、他動詞ともに結びつくが、その結果、複合動詞は全部自動詞になる。(唯一の例外は「召し上がる」である。)

「あげる」はほとんどが他動詞と結び付き、複合動詞も他動詞になるが、「しゃくりあげる」など生理現象を示す数語だけが例外的に自動詞になる。」としている。調査結果を概観したところ、薩隅方言の「～トル」は、後接の複合動詞後項によって、動詞の自他が変化することはほぼない。

「～トル」は、複合動詞前項の自他に従う。

以上、共通語の「完遂」・「完了」等を表す他形式との比較を簡便にはあるが行った。変化動詞に付接する場合に「極度の状態」の意味になり、動作動詞の場合に「数量的な動作の完遂」の意味になるというように、分布をなしている点で、薩隅方言の「～トル」は共通語の「～キル」に意味用法の上で近い。一方、前項動詞への付接の条件については「～シオワル」「～シオエル」が近似しているように思われる。2節で挙げた薩隅方言の例文と()内の共通語訳を比較すると、若干のずれはあるものの、おおむね薩隅方言の「～トル」が適用できない動詞は、共通語の「～シオワル」「～シオエル」にも適用不可能である。薩隅方言の「～トル」は意味用法の上で「～キル」に近く、付接する動詞に関しては「～シオワル」「～シオエル」に近いといえることができる。

4. まとめ

本稿では、薩隅方言の「数量的な動作の完遂」「極度の状態」を表す複合動詞後項「～トル」について、調査・考察を行った。2節3節で述べたことを改めてまとめると、薩隅方言の「～トル」は、

1. 「動作の完遂」を表し、主体変化動詞に付接する場合には「極度の状態」も表すことがある。
2. 数量や時間的な幅を必要とする。
3. 外的運動動詞に付接しやすく、動作性の高い動詞に付接する傾向にある。

ということが言える。また、共通語の「完了」・「完遂」等を表す複合動詞後項と比較すると、前項動詞への付接の条件については「～シオワル」「～シオエル」が近似しており、動作の種類によって「動作の完遂」と「極度の状態」の意味に分かれる点で「～キル」に近いことがわかった。

さて、これまで現代薩隅方言の「～トル」について考察してきたが、疑問として残るのは、「～トル」はいったいどのように生じたかという点である。その出自に関しては、今のところ不明と言うほかない。形の上で類似していることから本動詞「とる」との関係も考えられる。薩隅方言の本動詞「とる」は、共通語の本動詞「とる」と意味の上で大きな違いはないと思われる。森田(1989)から共通語の複合動詞後項「～トル」についての記述を以下に挙げる。

ーとる

「とる」が他の事物を自己側に引き入れる行為であるところから、

- (1)自己側に取り入れる意を添える。その結果、
 (2)対象が取り去られ、抹殺消滅する意を添える。

たとえば、「刈り取る」は“雑草が好ましくないので刈って無くなる”意(2)にも、“稲が実ったので刈ってとり入れる”(1)の意にもなる。(中略)

次のような例は、ふつうどちらか一方になる。

- (1)取り入れる……「受け取る、写し取る、奪い取る、選び取る、買い取る、書き取る、感じ取る、聞き取る、探り取る、抱き取る、抜き取る、乗っ取る、引き取る、読み取る」
 (2)取り去る……「討ち取る、拭い取る、ふき取る」

共通語の複合動詞後項「～トル」は本動詞「とる」からの派生であるとされている。薩隅方言の「～トル」も同様に、事物を引き入れる意味の本動詞「とる」からの派生である可能性はあるが、現時点では判断できない。

また、「看取る」のように、共通語の複合動詞後項「～トル」と薩隅方言の「～トル」と同様の意味を持つ語についても今後考えていく必要がある。「看取る」は森田(1989)の指摘する「(1)取り入れる・(2)取り去る」のどちらにも属していないように思われる。薩隅方言においても、「看取る」が「数量的な動作の完遂」を表すかははっきりと断言しがたい。これに関しては、今後調査を行いたい。

なお、18世紀前半の薩隅方言を反映するとされる漂流民ゴンザのロシア資料にもこの「～トル」が現れている。これがどのような意味用法を持ち、ロシア資料にどのように反映されているかについては、別稿に譲りたいと思う。

(注1) 薩隅方言の「～トル」は、付く動詞に限られており、完全なアスペクト形式ではない。薩隅方言と西日本諸方言のアスペクト形式と、「動作の完遂」を表す複合動詞後項とは次の通りである。「～トル」はアスペクト形式ではないため、太線を引いた。

	西日本	鹿児島
結果の継続	～トル	～ Chol
動作の継続	～ Yorl (～トル)	～ Goll (～ Chol)
動作の完遂		～トル

(注2) 薩隅方言の調査は、南さつま市在住の78歳・女性、80歳・女性、84歳・女性の3名をインフォーマントとして行った。

参考文献

- 青木博史(2004)「複合動詞「～キル」の展開」(『国語国文』第七十三巻 第九号)
 上村孝二(1968)「屋久島方言の研究—文法の部—」(『文学科論集』4号)
 上村孝二(1998)『九州方言・南島方言の研究』(秋山書店)

- 神部宏泰(1992)『九州方言の表現論的研究』(和泉書院)
- 金水敏 工藤真由美 沼田善子(2000)『時・否定と取り立て』(日本語の文法2)
- 金田一春彦(1976)「国語動詞の一分類」(『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房)
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキストー現代日本語の時間の表現ー』(ひつじ書房)
- 後藤和彦ほか編(1983)『講座方言学9 九州地方の方言』(国書刊行会)
- 瀬戸口俊治(1976)「鹿児島県指宿郡山川町徳光方言の方言表現法」(『方言研究叢書6』三弥井書店)
- 姫野昌子(1976)「複合動詞・「～あがる」, 「～あげる」および下降を表す複合動詞類」(『日本語学校論集3号』)
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』(角川書店)

(くぼぞの あい・本学大学院修士課程)